



写真（左）／1964年夏、ソ連にて。

写真（上）／1999年夏、オーストリア・エルンストブルン、Hübner先生の墓前にて。

35年ぶりの再会

人生第二の職場への 不思議な縁

1964年夏、AIESECの交換留学生として、横浜からシベリア経由で西独ミュンヘンに向かって旅立った。一週間程の船、飛行機、鉄道の旅で、同じ日本人グループの方々とも親しくなった。この中のお一人が人見楷子さん（現 昭和女子大学理事長）で、彼女の留学先ウィーンに着いたとき、寄宿先のW. Hübner先生（元ウィーンフィル楽団長）は、人見さんだけでなく、同行の私達も、ご自宅にお招き下さった。その後、音楽祭で演奏される先生のお車に乗せて、ザルツブルグまで旅をすることができ、終生忘れえぬ楽しい思い出となった。

1999年夏、ウィーンで開かれたEU-Japan Business Forumに参加することになったとき、3年前にお亡くなりになったHübner先生の墓参りをしたいと考えた。ウィーン在住の人見さんに、問い合わせのお手紙を差し上げたところ、丁度墓地のあるエルンストブルンの古城



前原 金一

昭和女子大学 副理事長

で、先生の追悼コンサートが開かれるので、連れて行って下さるとの嬉しいお便り。黒つぐみがさえずり、花々に囲まれた先生のお墓に参ったあと、ローソクを灯した古城での演奏会で、先生の奥様やお子様達とも、35年ぶりにお会いすることができた。

その後、人見さんが、お父上のお亡くなりになった後、昭和女子大学の理事長に就任され、私も学外理事として招かれることとなった。40年前に住友生命に入社したときに教えられた、伝教大師最澄の「一隅を照らす、これ即ち国宝なり」は、仕事をしていく上での大切な座標軸となってきた。昭和女子大学の建学の精神「世の光となろう」という、住友と同じ経営方針に導かれて、ごく自然に、人生第二の職場、昭和女子大学に勤めることになったのも、誠に不思議なご縁である。

私の思い出写真館